

CIEC Newsletter

お知らせ

- < 小中高部会第5 回研究会 >
 日 時：2000年10月14日（土）14:00～17:00
 場 所：コープイン京都2階会議室
 解 説：「CIEC と小中高部会の取り組み」
 講 師：「国際テレビ会議と子どもたちの学び」
 高木 洋子 (Teleclass International)
 「総合的な学習の時間における学校交流の実践」
 前田 先生 (神戸市葺合高等学校)
- < 小中高部会第6 回研究会 >
 日 時：10月21日（土）14:30～17:30
 テーマ：情報編集と学習方法
 講 師：松岡正剛氏
 (編集工学研究所長、帝塚山学院大学教授)
- < CIEC 第23 回研究会 >
 日 時：10月28日（土）13:30～17:00
 場 所：大学生協杉並会館2F
 テーマ：文部省・ミレニアムプロジェクトの概要
 講師：「教育現場からの問題提起」
 武沢 護会員 (神奈川県立教育センター)
 「IT 革命は教育を救えるか」
 佐伯 胖会員 (青山学院大学)
 「先生方の思いはどこ？」
 生田 茂会員 (東京都立大学)

CIEC 会員状況 2000.9.25現在
 個人会員：655名 (教員461、職員27、院生34、学生8、
 生協職員92、企業17、研究会5、その他11)
 団体会員：93団体 (企業33、生協56、大学3、法人1)

CONTENTS

研究会のお知らせ	1
CIEC 会員状況	1
< ニュース・トピックス >	
PCカンファレンス報告	2
・全体会とシンポジウムのまとめ	2
・分科会報告	3
・2000年PCカンファレンスについて	4
日本学術会議会員となって	5
小中高部会から報告	6
・情報教育セミナー報告	6
・インターネットと教育フェスティバル2000 にCIECセッション	7
新役員のご紹介	8
< ML 討論 >	
CIECメーリングリスト	12
< CIEC 活動報告 >	
1999年度第2回理事会報告	13
2000年度定例総会報告	15
・定例総会に提出された意見用紙	17
・2000.2001年度CIEC 役員一覧	19
理事会決定事項 (ML)	20
運営委員会決定事項 (ML)	20
活動日誌	20
2000年度スケジュール	20

CIECニューズレター

2000年9月30日発行

発行：CIEC (コンピュータ利用教育協議会)

編集：CIEC運営委員会

〒166-8532東京都杉並区和田3-30-22大学生協会館

TEL 03-5307-1195 FAX 03-5307-1196

e-mail :ciec-jim@ciec.or.jp URL :http://www.ciec.or.jp/

PC カンファレンス

終了致しました！

2000年PC カンファレンスは8月2日（水）～4日（金）の3日間、北海道大学高等教育機能開発センターにおいて、「試されるIT教育～新しい学びへの挑戦～」のテーマで、道内12団体の後援を得て開催されました。シンポジウム「コンピュータ利用による新たな学校と社会の結びつき」と公募によるレポート130本（分科会115、ポスターセッション15、＝内北海道53）、最終日の北海道企画が特徴で、520名（昨年517名、一昨年462名）の参加で無事終了しました。

全体会とシンポジウムのまとめ

三根 浩会員 同志社女子大学

全体会まとめ

2000PCカンファレンスは「試されるIT教育 - 新しい学びへの挑戦 - 」というテーマで北海道大学を会場として開催されました。第1日目の全体会は同志社女子大学三根の総合司会により実行委員会委員長の北海道大学大学院工学系研究科青木由直教授の開会挨拶から開始されました。今年の全体テーマは、北海道を元気づけようと全国公募で選ばれたコピー「試される大地」に因んで設定された、「試されるIT教育」です。この中心テーマであるIT教育という用語に関わるさまざまな課題をこのカンファレンスとシンポジウムを通して考えていきたいという基調が示されました。つづいて、開催校の北海道大学副学長の富田房男教授と開催地を代表して札幌市教育委員会の山恒雄教育長より開会のご挨拶を頂きました。富田教授からは札幌ヴァレーと呼ばれるIT関係起業家を育てられた青木教授を中心とするカンファレンスを北海道で行う意義を、山教育長からはさまざまな活用事例などの展開を地元として非常に期待していることを指摘されました。

シンポジウムまとめ

つづいて、「コンピュータ利用による学校と社会の新たな結びつき」をテーマとしてシンポジウムが行われました。メインパネリストとしては、岩見沢市の能勢邦之市長と公立はこだて未来大学の伊東敬祐学長をお招きして北海道大学の野栄三先生と高知女子大学の一色健司先生の司会によりシンポジウムの進行が行われました。まず、能勢市長からは、地方自治体の情報化施策のうち、地域社会と地方自治体との関係の側面を、主として市民生活や産業との関係から岩見沢市の取り組みについて報告されました。平成7年度から市が中心となってFMコミュニティ放送局を開局したことからスタートして、平成9年には地域情報化の拠点施設として自治体ネットワークセンターを整備することで、全市内の小中高校を同時に双方向で結び、一斉に授業が行える仕組みを全国で初めて試みたことが紹介されました。さらに、小中高校、医療機関、主要公共施設などを基幹として市が独自に幹線系光ファイバーネットワークを整備したことで、SOHOやサテライトオフィスとの環境共生型テレワークセンター構想を実現し、さらに無線LANを活用することで一般家庭も視野に入れたネットワークの構築に向け整備を進めている計画が示されました。

また、公立はこだて未来大学の伊東学長からは、歴史的な街である函館を活性化するために、それまでなかった理工系の大学を求める地域社会の強い要望の上に、公立はこだて未来大学の設置計画が出発した経緯が紹介されました。21世紀の科学技術を睨んで「複雑系科学」と「情報アーキテクチャ」との2学科を先ず策定し、そこから大学・学部の性格づけや命名を進めていったプロセスやオープンスペース＝オープンマインドを目標としてオープンな雰囲気を醸し出す校舎の設計理念についても、大学紹介のビデオを通して具体的に説明が行われました。5段の棚田のようなオープンスペースの上には巨大な吹き抜けが校舎体積の約2/3を占めており、全てがガラス張りの壁とあいまって極めてオープンな雰囲気が作りだされていることでオープンマインドで問題解決力を備えた学生の育成が期待されます。これらの構想を、カリキュラム、情報インフラ、コミュニケーション重視の環境などの具体的な計画に従って、新しい教育のあり方についての提言がなされました。

これらの報告に基づいて、3名のコメンテーターから、それぞれの視点に基づく提案と問題提起がなされました。まず、北海道大学教育学部の山形積治教授からは各種の

調査データに基づいて、今後ユーザーが利用していただくメディアの種類や教育にメディアを活用しようとする教員の世代別利用率などを示され、教師養成における教師の資質の捉え方に関する問題点や教える道具としてのコンピュータの役割について、発想の転換の必要性があることを指摘されました。東京都立大学の生田茂教授からは、地域と大学のかかわり方のあり方として、通常行われているようなキャンパスや授業を地域に公開して済みとするやり方ではなくて、大学の持っている人材を地域に提供することで「地域力」を高める観点が必要なのではないか、という指摘がなされ、その具体的な取り組みの例として「多摩・まなび」における実践例が紹介されました。続いて、滋賀県立日野高等学校の小西浩之教諭からは、「IT革命 - やっちゃいましたね」という形で、新教科の設置、社会参画の窓に関する話題提供が行われました。新教科の設置に関してはカンファレンス当日に実施中であった現職教員等講習会の様子を説明され、社会参画の問題に関しては高等学校で行われている開放講座、生涯学習の場、蒲生氏郷（がもううじさと）ホームページなどの実践の状況についても紹介されました。また、実際に、はこだて未来大学を訪問したときの印象をビデオを交えて、開かれた大学の実態の報告もなされました。

その後、パネルディスカッションが行われましたが、公務でお忙しい能勢市長に代わって岩見沢市情報化推進室の日浦正博氏を交えて熱のこもった質疑が行われました。はこだて未来大学のガラス張りの環境に関して大阪インターカレッジコープの植田さんより先生方の感じ方についての質問がありましたが、これについては伊藤学長と開設メンバーの一員である美馬先生とから実際の苦情と現場からのメリットについて説明がなされました。続いて、司会者の一色先生より質疑の論点を二つのキーワード（IT革命のための人材養成、学校と地域の連携）に括ってディスカッションを進行されました。フロアーからの多くの発言を含めて活発なディスカッションが行われましたが、その中では、開催地としての北海道の特徴も話題に上がるなど2000PCカンファレンスの開幕を告げる形で、非常に稔りの多いシンポジウムを行うことができたものと考えます。

分科会報告

鳥居 隆司会員 椋山女学園大学
野澤 和典会員 立命館大学

2000年PCCは、分科会・ポスターセッションの報告総数が130本と、過去最多に達しました。全体としては、何かを掴んで各参加者の環境へ持ち帰り、すぐにでも応用できるような充実した実践報告が多く報告されました。昨年に引き続き、小中高等学校での情報教育とこれらに対する大学での情報教育は、参加者も多く最も関心の高いテーマの一つとなり、様々な実践例をCIECを通じて紹介し、全国的な交流を図りたいという感想も聞かれました。また、外国語の分野では、中国語に関するコンピュータ利用教育の報告も多く発表され、さらに、コミュニケーションの手段として、様々な方向性を探る上で、新しい方向性も示されたように感じられました。福祉やNPO等のテーマでは、地方自治体との連携に関する部分も充実してきたと思われます。また、今回のポスターセッションでは、実物を見ながら、触りながら報告が聞ける発表も多く、時間をかけてゆっくりと発表者と話せたり、「お土産」CD-ROMなどがあつたりと、非常に好評であったように思われます。

PCCの分科会やポスターセッションでは、発表の分野や視点などが非常に幅広く、参加する方にとっては、自分の所属する学会や研究会などでは、ほとんど聞くことのできない分野を知ることができます。最新の技術を報



告する学会が高層ビルのようなものとするなら、PCCは、富士山のように裾野の広いものをめざし、結果的に高層建築より高いものとなるように期待できると思われま

す。分科会のテーマは、「コンピュータ・ネットワークによる異文化環境と外国語教育」、「コンピュータ・ネットワークを利用したコラボレーション型教育の教育実践」、「遠隔地教育」、「新教育課程に向けたこれからの小中高校と大学の情報教育」、「科学教育へのコンピュータ利用」、「コンピュータ・ネットワークとコミュニティ活動」、「人文社会分野におけるコンピュータ利用教育」、「コンピュータ・ネットワーク普及に伴う学習環境のデザインの変化」、「システム構築と運用」、「新たなプログラミング・教育への試み」、「専門教育・研究へのコンピュータ利用」の11テーマでした。(参加人数 8/3午前249名から298名、8/3午後197名から260名、8/4午前172名から240名、8/4午後70名から192名)

2000年PCカンファレンスについて

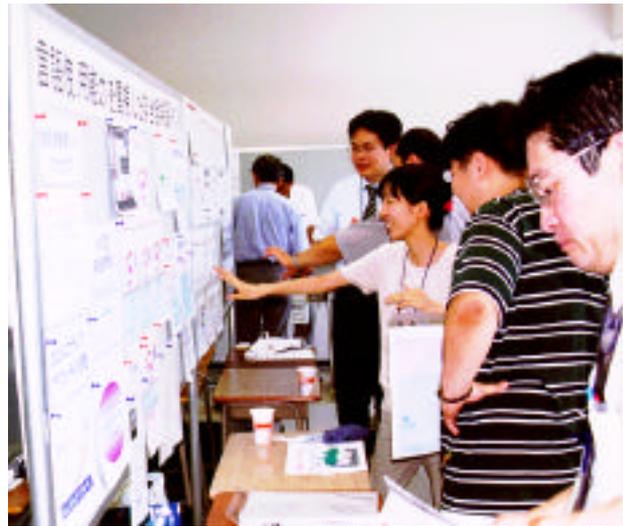
小野 進会員 東京大学

1, これまで、正直言いましてPCカンファレンスの実績の殆ど無かった北海道において、これ程充実した企画と運営がなされたことに関して、驚きとともに青木先生始め北海道の実行委員の方々始め運営に関わられた皆様のご努力と底力に感嘆致しました。同時に厚くお礼申し上げます。

2, 昨年のPCCでは始めて国立大学を舞台にして開催されましたが、今年、北大での開催によって、実質的に大学の規模の大小に関わらず国立大学で開催することが可能になったことを大きく印象づけることとなりました。これは、来年度においても、国立大学での開催がほぼ決まり、この流れが各地の国立大学へ波及していくことは重要であろうかと思われま

す。そうしたなかで、専門分野を越えて教育に携わる方々が、また、小中高の先生方、地域行政に携わる方々をも巻き込んで、IT教育について意見を交わすことのできるこのようなカンファレンスは、国立大学が今後どのような方向を目指すべきか、そのモチベーションをある意味では先取りした、極めて重要な内容が含まれていたのではないかと、思われるからです。今後、国立、私立に関わらずこのようなカンファレンスの意味は益々大きく、期待されていくのではないのでしょうか。

3, シンポジウムでは、かねがね司会者側のイニシアティブをもっと大きく取られてもいいのではないかと考えていましたが、今回はその点でかなり議論の整理をかけられながら、司会者サイドでうまく発言を取りまとめられたように思われます。しかし、個人的な感想としては、難しい注文ではありますが、フロアの意見を参考にしつつ、より司会者の考え方を前面に打ち出されてもいいのではないかと、思われます。つまり、司会者の個性がシンポジウムにもっと反映されていいように思います。この辺は事前の司会者会議での意思統一如何に関わりま



(小野進先生のセッション会場)

CIEC から第18期日本学術会議会員！

CIECが登録学術団体として認定されたのに伴い、第18期日本学術会議の会員候補者として、CIECから理事の佐伯胖先生（青山学院大学教授、東京大学名誉教授）を教育学の会員候補者として届けておりましたが、7月に内閣総理大臣から第18期日本学術会議会員（教育学）を任命されました。

「日本学術会議会員」となって

佐伯 胖会員
青山学院大学、東京大学名誉教授

突然、「内閣総理大臣」から、「第18期日本学術会議会員の辞令を交付するので、7月27日に総理大臣官邸まで来るように」という内容の文書が来て、何が何だかさっぱりわからず、ともかく、当日行ってみました。実際に総理が辞令を直接手渡したのは、よくある卒業式のように、代表（今期会員の最高齢者の井上和子氏）に対してのみであり、あとは総理のご挨拶だけという簡単な儀式でした。いざ、会員になってみると、文学、史学、教育学、社会学、心理学、文化人類学、哲学などの領域（第 部）のなかの「教育学」関連の会員（定員3名）のうちの一人名ということでした。ただ、教育学関連として約90の学・協会が学術会議に登録されており（CIECもそのうちの1団体）、それらの声をまとめるというのは、結構大変な役割だということがわかりました。ちなみに、小生以外の「教育学」関連の会員は、寺崎昌男氏（桜美林大学大学院国際学研究科教授）と潮木守一氏（武蔵野女子大学現代社会学部長）です。

こういうしだいですから、CIECからの推薦で会員になったとはいえ、いざ会員になると、出身母体の学会が何であるかはまったく無関係で、まさに、我が国の学術団体全体の統括的な活動をするのが主たる任務のようです。また、小生は、「教科教育」関連の研究連絡委員会の世話人ということになり、教科教育関連の学会の意見をとりまとめることになっております。残念ながら、これまでの「教科教育」のなかに、「情報」は入っておりませんので、CIECは教科教育学研究連絡委員会の正規のメンバーとは認められておりません。しかし、2003年度から高校に普通教科『情報』が新設され、すべての高校生が「情報」に

ついて学ぶことになっているので、「情報」という教科をどのようなものにするかは、教科教育にとって重大な問題であります。したがって、是非、この際、教科教育学研究連絡委員会として、「情報」科の教育について、正式に検討するようには取りはからってみたいと考えております。その場合には、CIECからのご支援をお願いすることになるかもしれません。

まったくの素人が突然、大役を申しつけられ、とまどっておりますが、何とか3年間の任期を無事に務め、少しでも日本の学術研究のあり方に新しい方向を開くことに貢献したいと考えております。よろしくご支援いただければ幸いです。

ご活用下さい！

CIEC入会のお誘いに「CIECご案内」(A4サイズ8ページ)をご活用下さい。事務局までご連絡いただければ必要部数をお送りいたします。



小中高部会から報告

< 概要 >

(1)「情報教育セミナー」報告

日時：平成12年7月8日（土）

12時45分～17時

12時00分～12時45分コンピュータ教室見学

会場：園田学園中学校・高等学校

主催：株式会社大塚商会

共催：コンピュータ利用教育協議会（CIEC）、
教育とコンピュータ利用研究会（ACE）

協力：園田学園中学校・高等学校 / 大阪府高等学校情報
教育研究会 / 毎日コミュニケーションズ（雑誌
MacFan） / 山口県情報教育ネットワーク研究会 /
キヤノン販売株式会社 / 日本文教出版株式会社

後援：K12『インターネットと教育』研究協議会

参加者：（現在大塚商会に問合せ中。ざっと40名、うち
高等学校から30名）

< 内容 >

「主催者挨拶」

阪田豪（大塚商会）

「開催にあたって」

CIEC理事 三根浩（同志社女子大学）

「新教科情報の導入にまつわる、あれこれ」

小西浩之（滋賀県立日野高等学校）

「教育現場の新しいインターネット活用法」

中島康明（大阪府立盲学校）

「コンピュータや情報メディアを理科の授業に生かす」

神村信男（山口県教育研修所）

「初めてのシステム導入、その成立までの過程」

木島行雄（園田学園中学校・高等学校）

「閉会にあたって」：大阪府高等学校情報教育研究会幹事

山下俊和（大阪府立北千里高等学校）

まず、主催者である大塚商会の阪田豪氏より開会の挨拶が行われ、引き続き、「開催にあたって」の挨拶としてCIEC理事である三根浩氏（同志社女子大学）よりセミナーの概要の紹介及び共催団体としてのCIECとCIEC小中高部会の活動内容に関する紹介が行われた。

最初の講師である滋賀県立日野高等学校の小西浩之先生から「新教科情報の導入にまつわる、あれこれ」と題して、物理の授業の中で、あくまで道具として「なるべく目立たないように」コンピュータを利用して来たという経緯の中で、突如「教科『情報』」が現れ、当惑している現実が紹介された。さらに、新教科「情報」免許取得のための夏期研修会に関する「うわさ」を含め、実施にあたっての課題を問題提起されたあと、同校における授業の実践、地域との交流などの具体例を紹介された。

2番目の講師である大阪府立盲学校の中島康明先生からは、「教育現場の新しいインターネット活用法」と題して、盲学校における情報技術利用の実践について紹介があった。同校では、テレビ会議システムを用いて大阪市内の柴島中学校ほかと交流している。Windows画面の内容を音声出力する装置や、文章を1行ずつ点字で表示する装置などを用いて、視覚障害者の情報手段へのアクセスが画期的に便利になったことなど興味深い内容に関する説明が行われた。

3番目の講師である山口県教育研修所の神村信男先生からは「コンピュータや情報メディアを理科の授業に生かす」と題して、新教科『情報』において、臨教審答申の「自主的な」態度から、情報機器の操作に重点が移行しつつある問題点を指摘し、光高等学校教諭時代の実践にもとづいて、何を学ぶべきかを示唆。生徒に自主的に課題を発見してもらえよう、そのヒントだけ提示するコンテンツを紹介された。

最後にセミナーの会場校である園田学園中学校・高等学校の木島行雄先生から「初めてのシステム導入、その成立までの過程」と題して、同校のコンピュータ・システム導入までの経緯の報告が行われた。同校では、教育用コンピュータが1台もない状態からスタートして、導入の是非、機種選定、利用法と討議してきた。機種選定においては、市場占有度にとらわれず「教育用コンピュータに必要な要件」という観点から徹底した議論をし、Mac、Winそれぞれ1クラス分ずつの導入となった。セミナー会場として用いられたMacチームが設計した教室のコンセプトと

して「互いの顔が見えること」や「グループ学習を重視するための楕円形テーブル」、そして学ぶ空間のデザインとして「カラフルな椅子の導入」などの説明が行われた。その結果、課外での利用状況においてMacの教室に対して圧倒的な支持が示されていることが報告された。

閉会にあたって、大阪府高等学校情報教育研究会幹事である山下俊和先生（大阪府立北千里高等学校）から、総勢700余名に及ぶ、全国初の情報教育に関する都道府県の研究会である大阪府高等学校情報教育研究会の発足の経緯と現状について報告が行われた。研究会は科目別にABC、および共通部分と障害者教育などを扱うDの4分科会で活動している。文部省の指導要領では真に情報社会の担い手となる教育はできない、との立場から独自の教材、カリキュラムの研究に当たり、対案として討議していく。各都道府県でも研究会を発足させ、現場の声を反映した教科内容にして行きたい、といった主旨が紹介された。

「おなじみの顔ぶれ」という声も聞かれたが、このような会には初参加という人も決して少なくはなかったようである。企業主催の会にもかかわらず、単なる製品導入事例報告はまったく行われず、教育のためのコンピュータ利用という観点で、密度の高い議論が行われ、大変有意義な会であったと言えよう。懇親会では「Mac友の会」的な雰囲気が強かったが、これは「上からの」導入によって、効率化や情報機器の操作に向かいがちな現状を案ずる各方面からの共通の懸念が、アップル誕生以来のサブカルチャー的な雰囲気に繋がっているためのように見える。

（文責：山田 祐仁）

（2）インターネットと教育フェスティバル2000にCIECセッション

インタラクティブエデュケーション2000 = インターネットと教育フェスティバル2000にCIEC 小中高部会が協力しました。

8月26日、27日の両日、早稲田大学西早稲田キャンパスでインタラクティブエデュケーション2000 = インターネットと教育フェスティバル2000が開催され、CIECから小中高部会が協力し、CIECセッションを受け持ちました。

この催しは、2003年の高等学校情報科設置を目前にして、情報教育の明日をよりよくしたいさまざまな個人、団体が集まって、シンポジウム、セミナー、ワークショップ等、思い思いのセッションが盛りだくさんに企画され、一緒に開催できたというところに価値があります。

CIECセッションは27日の14時から16時までの2時間、武澤、奥山、山田の三氏のリレー報告の形で進められました。CIECのホームページからCIECを位置づけ、PCカンファレンス報告を加えながら、山田氏の小中高部会発足の経緯と研究会活動、奥山氏から無線LANネットデイのとりくみ、武澤氏より副読本のとりくみが紹介されました。CIECの参加がおくられて決まったことにより、セッション内容の記述が単に「CIECセッション」となり、内容が不明確でわかりにくかったことは残念でしたが、他団体の取り組みを相互認識するなかで、CIECの活動がポリシーを掲げた活動であり実践的な活動となっていることを再認識しました。

参加者させていただいた企画の中で印象に残ったことは、通産省、文部省の型やぶりのお役人の発言、懇親会での情報教育の明日を考える企業の会の熱気、インタラクティブエデュケーション2000での佐伯先生のちょっとした挨拶での指摘、展示ブースというコーナー（PCカンファレンスでのポスターセッションに相当する）での統一問かけに対するそれぞれの表示とゆったりした説明でした。

（文責 CIEC事務局 仲田 秀）

新役員のご紹介

今回の役員選挙で新副会長、新理事、新監事になられた方々に自己紹介を兼ねてひとこといただきました。

生田 茂 新副会長

東京都立大学工学研究科（教育工学）

「東京に副会長がいないととても不便だ！」という話があり、事務局の皆さんと、東京大学や早稲田大学の先生方を一生懸命さがしたのですが、今回はどなたも無理と言うことで、引き受けることになりました。

大学では、18年間「情報基礎」教育を担当しながら、全学の情報システム作りに係わってきました。その間、学部も「理学部 -> 教養部 -> 工学研究科」と渡り歩き、現在、「情報教育工学」という講座を立ち上げています。UNIXのマシンさえ自分の机の下に収まる時代になり、全学のシステム作りに係わる若い教員がいなくなってしまったことに気付き唖然としています。今まで何をやってきたのだろうと。そう言えば、若い教員を育ててこなかったなあ。

最近、大学の果たすべき役割を自問自答しています。地域と大学との連携、大学間連携に首を突っ込み、「多摩・未来」「多摩・まなび」という二つのメーリングリストを主宰し、多摩大学コンソシアム構想に奮闘しています。地域のNPOにも参加し、「住みやすい、生活しやすい、優しい地域作り」とともに、事務局長や事務局員が食べていけるような収益性のあがる事業の展開を模索しています。

CIECには、特別な思い入れがあり、毎夏開かれるPC Conferenceには、生協の職員、学生と一緒に参加をしています。CIEC立ち上げ時の熱き思いを共有しながら、活動ができればと思っています。宜しくお願いします。

青木 由直 新理事

北海道大学大学院工学研究科

北大での2000PCカンファレンスの北海道企画として、「サッポロバレー」の未来に向けてIT関連教育に期待するもの」のテーマで大学教官、札幌のIT企業経営者、北大生の3グループでの放談会を企画、実行して、道内はもとより道外からのPCカンファレンス参加者にIT企業集積地サッポロバレーの存在をアピールできたと思っています。札幌には学生がIT（当時はこんな言葉は無かった）企業を興し、発展させ、札幌における学生の就職先を拡大して来た四半世紀の歴史がある。IT教育の先にあるものは、学校で習得したスキルを生かして職を得て、生活を確保していけるか、という現実である。地元における起業というのもその選択肢の一つである。しかし、これは極めて困難な選択肢である。ただ、前述のサッポロバレー誕生の原点となったものは、学生達が自分達で身につけ開発して行ったマイクロコンピュータ技術であった事を思い返すと、この「IT革命」と言われる作今の状況で、学生や社会の新人の若者が起業化に挑戦する元気があってもよい。そのような元気を少しでも引き出そうと、起業家新人賞の意味を込めて「三浦・青木賞」を設立して、本年中にはその第1回目の授賞を行おうと予定している。社会人1名、学生1名で、それぞれ特製トロフィーと50万円の賞金である。応募資格者は道内在住という制約がある点を除けば、国籍、年齢、職業等を問わない。5年間の制限付きの賞であるが、企業関係者、大学関係者、その他の協力による、従来なかった手作りの表彰制度であり、5年間にどんなITの新人が発掘できるのか期待を持ってこのプロジェクトを進めている。なお、この賞についてはURL：<http://www.bug.co.jp/maa/> でご覧になれます。

綾 皓二郎 新理事

石巻専修大学理工学部

この度新理事に選ばれました石巻専修大学の綾 皓二郎です。1989年から現在まで情報教育関連では「電子計算機概論」、「情報理学」という科目を担当しております。一般情報教育の在り方で悩んでいたときにCIECの存在を知り、1997年のPCカンファレンスから会員になってCIECのいろいろな活動に参加させていただいております。いままでカンファレンス委員、小中高部会世話人、国

際交流委員をやってまいりました。この間、CIECの皆さんから知的触発をたくさんいただきとても感謝しております。

選挙に立候補したときに、以下の活動目標をあげてみました。1) 高校と大学の情報教育の円滑な接続への支援、2) 大学における情報教育の在り方の再検討、3) CIECの存在意義を高める努力(会員数の拡大、会誌の拡販、国際交流)です。

1) は、小中高部会での活動です。2003年からの普通高校での情報教育の本格展開まで時間もありません。これからもCIECとして取り組むべき最重要課題の一つと考えています。3) の会員数の拡大という面で、小中高の会員を増やすためにも重要な活動です。

2) は、1) を受けて、今後重点的に取り組むべき課題です。カンファレンス委員として各種の研究会を企画していきたいと考えております。情報教育に関係する他学会とも積極的な交流ができればと考えています。3) では、会誌の拡販が学会としての存在意義を高めるためにも大変重要と認識しております。皆さんと協力して会誌が生協書籍部や大きな書店に行けば手に取れるようにしたいと考えております。3) の国際交流では委員としてあまり活動ができませんでした。これからがんばりたいと考えております。会員数の拡大では、地域生協に働きかけることはできないだろうかと考えたりしておりますが、どうでしょうか。

CIECの抱えている問題はいずれも“言うは易し、行うは難し”の手ごわい問題ばかりです。会員の皆さんのご協力を切にお願いいたします。

才田 いずみ 新理事

東北大学大学院文学研究科

日本語教育学という、外国人に対する日本語教育の方法を考えることを仕事にしておりまして、コンピュータを利用した日本語教育というのを研究テーマの1つにしています。現在は、インターネットを媒介にした外国人日本語学習者と日本人とのコミュニケーションの研究や、映像を利用して発音や発話を練習する遠隔学習教材の開発研究などを行っています。夏休みが稼ぎ時のはずなのですが、さまざまな雑務に追われて、ちっとも研究が進みま

せん。今年は仙台もかなり暑い夏でしたので、エアコンのない研究室では、余計に効率が悪くなったのだという言い訳も成立しますが、自前のCPUにガタが来ているというのかなり確かなことであるらしく思われます。

このような情けない状態ですので、胸を張って述べられるような抱負はないのですが、CIECの新参者として、世界中に広がる日本語教育のネットワークを通して手にした私の専門分野でのコンピュータ利用教育の現状や課題を皆様にお伝えし、皆様の蓄積なされた知見を学ばせていただいて、ガタの来ているCPUにショック療法の刺激を与えつつ、成長していくことが出来れば...と思っております。

瀬川 良明 新理事

北海道教育大学
教育学部附属教育実践総合センター

世紀末も近いというのに、北海道はBI (Before Internet) の地域が多い。今、学校関連リンク集(東京書籍)で検索してみると、URLが登録されている北海道の学校は、小学校88、中学校88校に過ぎない。ちなみに、インターネット接続率は、文部省調査(平成11年度末)で小学校が28%、中学校が48%弱という。

9月10日、北海道内約50カ所で一斉に行われた「Do IT! ネットデイ」というイベントに、ボランティア参加した。私が担当した室蘭市では、ネットデイにより全ての小中学校がインターネットを利用できるようになる。(実は、あと2つの学校は16日に作業を行う予定)

作業自体は、それほど面倒なことはなく予想以上の速さで3校への設置作業を終了することができた。それは、持ち込みコンピュータのセットアップやOSのインストールなど、十分な事前準備がなされていたからである。

このようなネットデイ事務局の奮闘努力をみていると、PCカンファレンス事務局の素晴らしいスタッフのことを思い出さずにはいられない。

ネットデイそのものはイベントであり、接続された学校へのアフターケアが必要なほうでもない。学校という需要に対して、スタッフ供給という地域的な不均衡は、ポスト・ネットデイを想像するとなかなか苦しい

ものがある。

CIECにあっては、小中高部会との関連のなかで、教育利用への支援など、息の長い地道な活動に、より積極的に関与していきたい。それは、"Do it!"という強制的なものではなく、あくまでも"Shall we"という共生的な関わりあいでありたい。

原田 康也 新理事

早稲田大学法学部

1994年11月に早稲田大学情報科学研究教育センター(現在メディアネットワークセンター)の教務主任に嘱任し、早稲田大学の情報化推進計画の策定と実施、特に情報教育のカリキュラムデザインならびに教育用情報環境の構築と整備に関わってきました。また、法学部の英語担当教員として、ネットワーク化したコンピュータ教室、マルチメディア教室、プロジェクトなどを備えた小人数用教室での授業実践手法の検討とそのために必要なハード・ソフトのあり方を検討してきました。現在は「教育の情報化」特に「英語教育の情報化」における小学校・中学校・高校と大学の「連携と支援」を主要な課題と捉えています。

CIECとは1996年7月に早稲田大学大久保キャンパスでPCカンファランスが開催されて以来のおつき合いですが、教室にAVネットワーク機器を導入する時の問題点から多数のPCを学生の利用に提供する場合の注意事項まで、これまでの早稲田大学での経験を活かせればと考えております。また、「教育の情報化」というと、多額の資金を投入してインフラを整え、高価なソフトを購入して、特別な技術をもつ人間が長い時間をかけなければ実現しないという印象が世に広まっていることを危惧しています。目の前にあるなんでもない機械を使って、特別な技術のない普通の教員がそこそこの時間と努力できること、こうした点から英語教育の情報化を考えた時、いま必要とされているのは何か考えています。プロフィール:(詳細は<http://faculty.web.waseda.ac.jp/harada/index-j.html>参照)

平井 廣一 新理事

北星学園大学経済学部

「歴史教育におけるコンピュータ利用の可能性」

わたしは、勤務校で日本経済史と日本史という歴史科目を担当しているが、最近、テキストあるいは資料集、年表などを使用しながら話をするという従来型の講義スタイルに学生が興味を示さなくなってきたのではないかという意識を持ち始めている。

もちろん、講義の善し悪しは内容によるので、方法や手法についてとやかく言うのはこの次であることはいうまでもない。しかし、内容をより学生に興味深く勉強してもらうためにコンピュータをうまく使えないかというのがわたしの最近の関心事である。

そういう意味では、今年の北大でのPCCの分科会「人文社会科学教育におけるコンピュータ利用」は、面白い報告があった。例えば、歴史地図を画面上で紙芝居が進むように動画化して時代の推移を連想させるというのがその一つである。

ただ、わたしたち「文科系」の最大の弱点は、そうしたソフトを自前で作れないことである。あたかも手書きで、あるいは糊と鉄で切り貼りしたプリントをコンピュータの画面上で作成できるようになる日はいつになるのだろうか。

和田 勉 新理事

長野大学産業社会学部

今回新たに理事になった、和田 勉(英語名Ben Tsutomu WADA、所属:長野大学産業情報学科情報コース)です。CIECへの参加は、1999年4月ごろから時々研究会に出席するようになったのが始めです。私はコンピューティング科学を専門・基盤としており、ここ10年ほどは主に、情報・プログラミング的思考方を学生・生徒を中心とした初心者にどう分かってもらうかということをも自分なりに工夫してきました。その延長として、情報処理学会の高校新普通教科「情報」試作教科書を作る際、分担執筆者として参加しました。今後、情報の科学的側面を重視する立場からCIECの活動に貢献したいと思います。

また以前から個人的に「副業」と称して中国語と韓国語を少しずつ学んできました。これはもともと「本業」の情報分野とは無関係に学習してきたのですが、機会があればこの双方を生かした活動もしたい、とはずっと思ってきました。2000PCCをきっかけに、今後はCIECの外国語部会等の場にも外国語教育専門の方たちとは異なる視点から私なりに参加したいと思えます。また同時に、アジア圏内の国際交流にも貢献したいと思えます。

より詳しいプロフィールは以下のウェブページをご覧ください。<http://www.nagano.ac.jp/ben>

妹尾 堅一郎 新監事

慶應義塾大学知的資産センター

新監事の妹尾@慶應義塾大学です。CIECのPCカンファレンスでは毎回3本の報告を行なっていますので、ああ、あの元気のいいヒゲのヤツか、と思いついていただければ幸いです。会計等を監査するというのは得意ではありませんが、事業が適切であるかどうか、理事の方々とは別の面から意見を具申できればと思います。よろしく願います。

私は、知的資産センターの副所長という役職ですが、現在のはむしろ、慶應の新しい社会人キャンパス(丸の内シティキャンパス)の総責任者として、また新研究キャンパス(川崎と山形鶴岡)の設立担当の一員として忙しい毎日を送っております。また、慶應の戦略的の子会社(?)である慶應学術事業会という株式会社の代表取締役として産学協同研究のプロデュースを行なっています。

そういったことから、メディアを駆使した研究環境や社会人の学習環境の実際に関わっています。特に、広帯域のネットワークが敷かれたときの学習環境やワークスタイルがどのように変わっていくのか、その準備をしなければなりませんので、この点に興味があります。

また、最近の私がよく話題にするものが二つあります。第一は、「教育モデルの変容」です。ビジネスモデル、マネジメントモデル、生活モデル、行政モデル等々が新しいデジタルメディア環境の中で大きく変容していく時に、教育だけが旧態依然の形態でよいのか、それを検討すべきではないでしょうか。第二は、「パソコンができても仕

事ができないヤツ」の増加にどう対処していくべきか。「仕事ができるが、パソコンはできない」はもうナンセンスです。また、「パソコンの使い方」だけでしたら多くのパソコン教室があります。「パソコンを駆使して仕事がさらにできるようになる」教育プログラムを開発していくことが求められているのではないのでしょうか。

CIECも、学校教育におけるコンピュータ利用だけでなく、社会人教育におけるネットワーク活用と教育にも目を向けてはいかがかと思います。

辻 正雄 新監事

早稲田大学商学部

専門領域が会計システムであるという理由から、この度CIECの監事に就任させていただくことになりました。何卒よろしく願い申し上げます。

学部及び大学院におきまして会計情報システムの講義と研究指導を担当いたしておりますが、コンピュータ教育に関しましても第2世代のコンピュータの時代から今日まで20年数年にわたり携わって参りました。5年程前に開催されましたCIECの大会におきまして「商学教育におけるコンピュータの利用」に関します報告をさせていただきました。

大学におけるコンピュータ教育は、高校において行われている実状を正しく理解し、社会において求められる能力を的確に把握したうえで、適切に行われなければなりません。CIECはそうしたことの実現を支援している重要な機関であると考えております。CIECの発展に微力ながらお手伝いさせていただきますことを大変うれしく存じます。

CIEC メーリングリストから

(2000.7.4 ~ 9.20)

「CIEC TypingClub は小学生にも使えますか」との質問に対して、鹿児島大学の板倉会員より「使えます」との回答がありました。(ciec 01563、01567 ~ 01569)

情報教育セミナー(大塚商会主催、CIEC・ACE 共催)のご案内 (ciec 01570)

室蘭市教育委員会の佐藤氏(2000PCCレポーター)からのメッセージ。有珠山噴火災害に対応されている旨、報告がありました。(ciec 01571、01572)

卒業論文登録のDMが紹介され、論文をWebに掲載することについての意見が寄せられました。(ciec 01573 ~ 01575)

第18期日本学術会議の会員候補者にCIEC推薦の佐伯胖理事が選出された旨、報告されました。佐伯理事は7月下旬に内閣総理大臣により第18期日本学術会議会員(教育学)に任命されました。(ciec 01576)

CIEC 役員選挙のお知らせ (ciec 01577)

PC カンファレンスの参加申し込みについて (ciec 01578、01580)

三重県の山崎会員より無線 LAN利用についての質問が寄せられ、団体会員であるメルコの永井氏よりアドバイスがありました。(ciec 01579、01584 ~ 01587、01589 ~ 01601)

PBC (Pacific Basin Consortium)「環太平洋教育者地域会議」関連報告 (ciec 01581)

小中高部会研究会の予定 (ciec 01582)

分科会レポートのCIEC会誌への投稿のお誘い (ciec 01583)

「情報教育セミナー」報告 (ciec 01588)

都立大学の生田会員よりLearning Sapce用教材コンテンツ(試作)の紹介がなされました。(ciec 01592 ~ 01596)

Mathematica ユーザー会ワークショップのお知らせ (ciec 01597)

早稲田大学での「インターネットと教育フェスティバル」にCIEC が協力団体として参加、小中高部会がセッションを受け持つことになりました。(ciec 01598、01599、01602)

早稲田大学での「インターネットと教育フェスティバル」で報告された文部省岡本氏の論文について活発な議論が展開されました。これを受けて、10月28日に「文部省学習情報課『ミレニアム・プロジェクト『教育の情報化』を考える』をテーマに研究会が開催されることになりました。岡本氏の論文は次のサイトでダウンロードできます。http://www.manabinet.gr.jp/ (ciec 01603 ~ 01616)

秋の研究会の予定 (ciec 01617)

大阪インカレコープの植田会員よりPCカンファレンス感想文が寄せられました。(ciec 01620、01621、01623)

CIEC 小中高部会研究会のご案内 (ciec 01622)

ネット課金方法が特許になり得るかについて (ciec 01624、01625)

世界オンライン教育学会からのメッセージ(ciec 01626)

CG-ARTS協会/教科「情報」のための授業研究会のご案内 (ciec 01627)

カンファレンス委員会からご連絡

「研究会の提案につきましては、予定開催時期の2ヶ月前までに、ニューズレター20号掲載の申し合わせに従ってご提案ください。

なお、この申し合わせについては、CIECホームページのカンファレンス委員会のページにも記載されています。」

以下設定可能な日程は以下の通りです。

1月27日

2月24日(私学中心)

3月17日、24日

4月7日(21日)

5月19、26日のうち1日

6月2、9、16、23、30の内2日

うち1回はプレカンファレンス

7月7日

お問い合わせ、ご質問等はCIEC事務局までご連絡下さい。

CIEC活動報告

1999年度 CIEC第2回 理事会報告

日時： 8月1日（火）18時30分～20時30分

場所：北海道大学 情報教育棟4階、共用多目的室

出席：奈良、松田、矢部、赤間、生田、一色、石川、板倉、指宿、上村、小野、大岩、奥山、籠谷、小西、小林、榊原、佐伯、立田、田中一、田中寛、鳥居、松浦、野澤、松原、三根、宮本、森、吉田、若林、大野、野田、

監事・選管：朝岡、今国、辰己、

オブザーバー：綾、青木、瀬川、和田、

欠席：卜部、湯浅、武沢、匠、筒井、荒巻、原田、左京、
（才田、原田、平井、辻、妹尾）

矢部副会長の司会ですすめた。

議事の進行は以下のとおり。

1. ご挨拶と自己紹介

奈良会長からの挨拶

「CIEC第3期会長を引き受けることになった。今後2年間、理事の皆さんを始め、すべてのCIEC 会員のご協力を得て、この大任を果たしたい。よろしく願いたい。CIECはその設立以来4年を経過し、5年目を迎えた。この間CIECには、全く問題がないわけではないが、総じて言うところ順調に歩みを進めてきたと思う。昨年CIECが日本学術会議から「学術研究団体」と認定され、かねてからCIECが会員の佐伯先生を学術会議会員として推薦していたが、目出度く学術会議会員となられた。CIECの過去4年間の実績をCIEC内部だけで自我礼賛するのではなく、広く社会的に評価していただけるきっかけになることを期待している。

CIECに問題がないわけではないと申し上げた。それら問題の根源は、CIEC会員（個人会員と団体会員）の伸び悩みであると私は考えている。CIECのすべてのアクティビティはCIECの会員によって支えられており、CIEC会員の数と熱意がCIEC発展の源であると思う。その他の問

題は、今後は「中期目標の検討」の中で考えていくことになるが、これらすべての問題の改善に理事の皆さんのご協力をお願いしたい。

最後に、一つだけお願い申し上げたい。私は今期のCIEC会長としての任務を全力で果たすことをお誓いしたが、私はもう若くはない。そろそろ新進気鋭の若い会長にCIECの後事をを託すべき時期が来ていると考える。適当な時期にこの問題をご検討下さるようお願い申し上げたい。」

佐伯理事、学術会議会員についての挨拶

「第1部所属の教育系ということで選出された。国際会議や国内のシンポジウムなど数回開くこと、研究連絡員として、研究連絡、科研費の調整、学会の活動を活発にする、等が任務らしい。よろしく。」

出席者ひとりひとりの自己紹介を行った。その中で意見が幾つかあった。

・PCカンファレンスは夏開催が多いので、開催地が東京以北になり、関西、九州での開催が抜ける傾向にある。時期は夏にきまっているのだろうか。

・開催校は大学生協連とCIECが共催なので、CIECと相談しながら大学生協連で責任をもって決めることになった。2001年は金沢でお願いすることになったが、2002年は公募している。いろんなところから立候補してほしい。

・小中高の先生方用の講習会をもったらどうか。

・総会議長候補としての質問が若干あった。

2. 総会準備について

(1) 総会の運営と担当分担を司会より以下のように提案し、それぞれ確認した。

「その1、資格審査と総会成立要件について。確認方法は参加証と委任状、挙手で確認。選挙の方法は選管から報告し確認をつける。資格審査は田中寛理事、森直之理事。

その2、議長、副議長候補として、指宿理事、籠谷理事を総会に提案する。

その3、提案分担は事業報告、事業方針は矢部副会長、会

計報告と予算案は松田副会長、監査報告は朝岡監事、役員選挙は辰己選挙管理委員長。」

その後、議案書にもとづいて、討議した。

・事業報告と事業方針について、矢部副会長より文案のように提案したい旨提案し、確認された。

・会計報告と予算案について、松田副会長より文案のように提案したい旨提案し、確認された。

・監査報告について、朝岡監事より文案のように提案したい旨提案し、理事会資料である運営委員会へ提出の監査意見書の説明を行い、総会提案の内容について確認した。

・役員選挙について、辰己選挙管理委員会委員長より、7月24日の開票結果について報告され、総会への提案内容について確認した。

(2)書面議決、及び委任状の回収状況について、事務局より書面議決122、(議長)委任状10通を報告し、資格審査の両理事の確認を総会前に行うことを確認した。

(3)意見用紙 記載内容とその対応について、6通を確認し、理事会としての回答の基本見解を矢部副会長より提案し、確認した。

(4)議案提案内容、付属資料について、議案書のチェックを行った。「資料部分日誌の「3役会議」の呼称は正式会議ではないので、「会議」の表現は文書からはずし、「打ち合わせ」等にする、呼称は別途検討する。」ことを確認した。

(5)総会運営のタイムテーブルをチェックし、運営担当分担に以下を加えて確認した。「総会司会は小野理事、選挙報告は総会には得票明細つきではない当選者名簿を用意する」

3. 中期目標検討課題について

(1) 中期課題検討委員会を代表して一色理事より中間報告の中で理事会での討議が必要な部分について説明があった。

「中期的に重視して取り組むべき課題の部分が討議不十分である。優先順位、はずすべき課題等を議論してほしい。アンケートに寄せられた意見をまとめてみると、その1、学術団体、協同組織であっても、経験交流ですすめるべき

であり、学術的深化が必要である。矛盾しているようだがそうではない。団体としての性格で当面どちらに重点を置くべきか、理事のみなさんのご意見をうかがいたい。その2、中期課題のメーリングリストで、会員アンケートのランキングをつけ、分析しておいたが、この方向で、まとめていいかどうか、かえる必要はないのか。その3、中期的に重視して取り組むべき課題に欠落がないかどうか。その4は中期課題検討委員会の報告は年内の早い時期にまとめたい。そして、今年度中に理事会としてどうするかの実施計画をつくっていききたい。そのスケジュールでいいかどうか。」

(2) その後4グループに分散して討議した。(別途資料として用意してあるがここでは略)

(3) まとめ討議

第1グループ 奈良会長

中間報告へのフリートークを行った。中期目標検討はCIECの一番大切にする特徴、大目標があって、その具体化をすることではないか。CIECの特徴を全面に掲げて報告はすべきである。小中高大学を含めて情報教育に関する教育のあり方を提言する団体でありたい。CIECは専門領域を越えている。小中高の先生の記事が増えすぎては困るという意見があるようだが、それは間違っている。

第2グループ 一色理事

テーマにとらわれず、比較的自由に討議した。団体としての性格、PCカンファレンスについてを中心に議論した。PCカンファレンスはあまりアカデミックでなく雑多な敷居の高くない運営がひきつづき必要である。研究会に関しても同じことがいえる。今後の会員拡大は教育での経験交流ができるようにして、小中高部会や研究会の地方開催が接点になるだろう。通産、郵政のプロジェクトに応募するときの事務局団体になることもいい。

第3グループ 若林理事

5点ポイントがある。その1は検討事項が多いが、具体化してきめるのは、検討課題を目標にするかどうかである。その2はCIECの会員の半分以上を超える部分が小中高の先生であるというようになれば、自由に教育にからむようになるのではないかと。その3は学術交流組織であるが、どんな学術交流ををしたいのか、専門的ではないが大学の先生が多く、教育のコンセプトや技術について、コラボレーションできる組織。その4大学生協にとっての組合

員活動の一つとしてあり、各生協の所で位置づけて学んで持ち帰るような、生協職員にとって意味があること。その5、政策的には文部省からふってきたことに現場を踏まえて活動すべきである。

第4グループ 野澤理事

構成メンバーからの意見が分散した。団体会員との関係はこれでいいのか、個人会員は増やさなくていいのか。CIECと大学生協が、お互いに影響しあう存在として魅力ある関係を守るべきである。これをうけて討議を行った。

・小中高にもっと加わってもらうなら、少しずつイベントを開催するのではなく、何を機軸にするか、何を押し出すかを明確にして実施する。

・今が絶好のチャンスである。高校での情報教科導入に向けて講習が始まってきている時でもあり、どのような活動をするかを具体的に決めて実行する時期である。情報交換の場が求められているのである。

・いろいろな学会から入会案内が送られてくる。CIECの、高校の先生といっしょに活動できるなどの特徴をもっと押し出して、案内(パンフレット)を作り直す必要がある。

まとめ、一色理事、

宿題はすべてマイナス方向にはでてこない。各グループのリーダーは中期目標のメーリングリストに書き込んでいただきたい。議論し、年内にはまとめたい。

4. その他事項

(1) 次期会長問題 松田副会長

「相談があった。若干の議論をしてきたが、御奮闘をお願いしてきた。もう一期つづけていただき、新理事会の責任として、会長を選出するための作業を始めたいと思う。」確認された。

(2) 学習用ソフトウェアに力をいれたいという大学生協連の委員会がうごいている。委員をCIECからも推薦した、独立しているが、CIECの活動とからんでくるので、協力関係ですすめていく。確認した。

(3) PCカンファレンスの論文集のデジタル化について検討する。

(4) 研究会活動についての申し合わせ、他団体と共同して

開催する催し事などに関わる取り扱いについてを確認した。(別紙)

(5) 中期目標アンケートの中で、積極的参加を求めている会員とともにすすめること、当面各委員会のメーリングリストにはいってもらおうよう呼び掛けることを確認した。

(6) 次期役員体制の新運営委員について、推薦を確認した。

(7) 年間会議日程などのスケジュール、広報スケジュール、主催、共催研究会の日程案について、提案を確認した。

(8) その他、以下の議題は事務局打ち合わせ会議で検討し、運営委員会で確認する。

財政基盤の強化と会員拡大のとりくみについて、副会長の役割分担について。

(9) PCカンファレンス時の理事会の交通費について、交通費はできるだけ安価な交通費実費のみとする事を確認した。

(10) 2000年度プロジェクト費について運営委員会の決定を確認し、「総合的な学習」部会の発足提案を確認した。

以上

2000年度CIEC定例総会報告

日時：2000年8月3日 16時17分～17時10分

場所：北海道大学 情報教育館3階

スタジオ型多目的中講義室

出席：本人出席70(本人65、団体7)

書面85(本人60、団体25)

委任状14(個人13、団体1)

議事：

1. 総会の成立確認

・会長より指名された司会者小野進理事(東京大学教員)開会を宣言。司会者より、会員数は712名(621名、91団

体) 成立要件は73名以上の出席対し、73名以上の参加を確認して、CIEC 2000年度定例総会の成立が告げられた。

2. 議長・副議長の選出

・司会者より、理事会からの議長団推薦の紹介があった。議長に鹿児島大学の指宿理事、副議長に東京工業大学の籠谷理事の推薦が告げられ、ほかに立候補はなく、拍手で確認された。

3. 奈良会長より開会の挨拶

「今年はCIECの中期目標を設定する年、年内にはまとめたい。北海道のみなさまに今年のPCカンファレンス開催に際してお礼申し上げます。」

4. 議事運営に関して議長より提案

・効率の良い議事運営のために以下の提案があり、拍手で確認した。提案は、役員選挙以外は連続して提案し、提案後一括して討議する。採択は、議案ごとに個別に採択、出席者の過半数の賛成で議決する。

5. 議案 1

・「1999年度事業報告と2000年度事業計画」の提案を信州大学の矢部正之副会長より行った。

6. 議案 2、議案 3、議案 4

・議案 2「99年度収支報告」、議案 3「99年度収支差額処分案」、議案 4「2000年度予算案」の提案を一括して、立命館大学の松田憲副会長より行った。

7. 監査報告

・議案 2 に関する監査報告を朝岡良平監事より行った。

8. 意見用紙の紹介と回答

書面議決と一緒に届いた 6 通の意見用紙の紹介と回答を矢部正之副会長より行った。(詳細別記、NewsletterNO.21 掲載)「いろんな意見が出ることがCIECの活動のエネルギーのもとになっている」

9. 討論

全議案を一括して行った。意見はなかった。採択は議案ごとに、連続して委任状を含めて行い、出席者の過半数の賛成で、議決。書面出席85を加算する。

議案 1 から 4 まで賛成多数で採択された。

10. 議案 5

・議案 5「役員選挙」について、議長より選挙管理委員会に報告を求めた。

神戸大学の辰己丈夫選挙管理委員会委員長より以下が報告された。

今回の役員選挙は、CIEC 会則にもとづき、役員選挙規約にもとづき、理事会の確認において行った。選挙権、被選挙権はともに、立候補の締切までに99年度の会費を納入した方で、648名(個人会員560、団体会員88)であった。

5月19日、選挙管理委員に神戸大学辰己丈夫会員、東京薬科大学菊地祐子会員、立教大学内田由美子会員が任命された。5月30日に公示、6月12日正午に立候補を締め切った。立候補は定数内で、信任投票であることを選管で確認した。また投票の方法は、すべて郵送によるものとし、6月21日に発送した。投票は7月15日消印までで締め切りとした。開票は7月24日18時10分より、選管の管理のもとで立会人を置き、厳正に行った。

開票の結果は次の通り。投票総数190票、有効投票190票、無効0票

信任185～189不信任1～5よって信任された。

11. 役員選挙結果の承認

・選管より報告された役員選挙及び役員選挙の結果について、拍手で確認された。

・会長より全員壇上にあがり、新役員の紹介を行った。

13. 閉会

・17時05分籠谷副議長より議事終了がつけられ、議長団の解任とCIEC総会の閉会が宣言された。

CIEC定例総会に提出された意見用紙

～2000年8月3日定例総会に於いての回答～

菅 正彦 会員 北海道教育大学札幌校
【会計年度（会費納入時期）について】

私に関係している多くの学会では会費納入時期が12月となっております。本会の様な春に納入する所はなく、そのため会費納入を忘れてしまうこともありましたが、あまり本質的な問題ではありませんが、また他の学協会の会費納入時期について多くを知っているわけではありませんが、会費納入時期を12月にすることは考えられないでしょうか。私のようについすっかり忘れてしまう(他の学協会との納入時期の違いから)人が多くいるのであれば、会費納入を重ねて連絡するための手間、経費の節約になるかと思えます。

【回答】 私の所属する学会でも、納入時期が12月のものもありますし、新年になってからと言うものもあります。CIECのような様々な専門分野の方が集まっている組織では、多分様々な時期、場合によっては学会開催時に何年か分まとめて払うのが、推奨されないデフォルトとしてあるとも聞きます。このような事情で、納入時期がいつが適当かを定めることは困難だと考えます。

また、私のような粗忽ものは、その時期がいつであっても、失念してしまい督促など学会事務局に迷惑をかけることが度々でした。最近では、銀行自動振込みでそのような失敗をすることがなくなり、無駄な気を使う必要がなくなりました。CIECでも、自動振込みの制度がありますので、不精者の私は勿論利用しています。CIECの財政の安定のためにも、自動振替をしていただくと助かりますので、会員の皆様はぜひ手続きをしていただきたいと存じます。よろしくお願ひします。

青木 晴男 会員 高知女子大学
【議題4について】

私は四国・高知に住んでいますが、「コンピュータ利用による教育」はまだ実践できておらず、今後してみたいと計画中です。地方研究会というものもあるようですが、何か地域ごとのブロックでの「コンピュータ教育」の情報交換のできるWeb-siteなどないものでしょうか。因みに私は英語・英文学・文化科目を担当しています。

【回答】 今後のCIECの活動の中で、大都市のみならず、地域での活動を進める必要が検討されています。また、コスト的な問題から、ご質問にあるようなオンラインでの情報提供もCIEC自身の活動として、検討していかなければならないものと存じます。CIEC独自でこのような取り組みをするとともに、関連の情報提供も可能な限るできるよう努力する所存です。特に、ご専門の分野については、外国語教育研究部会を本年度設置いたしますので、ぜひご利用ください。

匠 英一 会員 (株)ヒューコム
【研究会について】

会員の自主的な研究会作りやそれへの参加を支援することを重視してやっていく必要があると思います。中央集権的な傾向が強く、ある意味では、教育活動の内容を狭くしているように思えます。各地方の会員や企業関係者の参加の仕方をもっと工夫したいところ。小生も研究会をやってきましたが、各メンバーの継続的な『研究』が弱く、その場でのデモンストレーションになっているような面があった。本年度よりこうした研究の閉じたあり方を直していきたいですね。

【回答】 CIECは、どの組織よりも民主的な運営を目指していますが、設立から時間がたつにつれて、組織が大きくなるにつれて、運営が軌道に乗るにつれて、どんな組織でも中央主権的、官僚的になる傾向はあり、それを厳に戒めなければならないと、自覚することが大事だと思います。

研究会については、会員の自主的な提案を受け止められるよう、一昨日の理事会で具体的な方法を定め、近々に会員の皆さんにお知らせする運びになりました。皆さん、積極的なご提案をお願いいたします。研究会活動が定着し、より地に足のついた活動・研究に発展できるよう、CIECが支援することも大事で、その一端は「部会」と言う形で実現しつつあります。そのためのプロジェクト事業費も充分とはいえませんが、用意しております。是非、ご活用ください。

藤沢 大 会員 朝日大学大学院
【議題2について】

P.5の研究会費の支出について、多地点会議は1回だけで32万もかかる。この会議は私個人としては積極的に行いたいですが、通信会社などの協賛を取り付け、1回あたりのコストを下げるなどで何とか遠隔地でも参加の機会を

増やすことはできないだろうか？

【回答】 ご指摘の研究会でも、この費用はNTTへの通信料の支払いのみで、その他のサービス利用料は、タイアップで無料になっております。しかし、より企業との協力を進めることは、CIEC設立当初からの理念にもあることで、すから、今後さらに努力していきたいと存じます。また、NTTのISDN以外にインターネットなどの手段も利用して、遠隔地での参加の機会を増やすことを、検討・研究することもCIECにとって大事だと思います。皆様のご意見・ご提案またご参加を、是非お願いします。

平木 外二 会員 石川県立小松工業高校
【議案1について】

小中高の会員増大をいかにかはるかが、このCIECが他の学術団体と違った存在となるカギになると思います。

【回答】 「コンピュータを利用した教育」を核に様々な専門、様々な立場、様々な考え方をを持った方々が集まり、そのスペクトラムの幅が広ければ広いほどCIECの目的を達成する力になると思います。

その意味で、専門を絞り、場合によっては同じ専門でも学派ごと存在する通常の学術団体とは異なる方向を目指しており、その構成員のなかで、学校教育の主要な部分をしめる小中高の会員を増やすことは、重要な課題と考えております。現状は残念ながら、充分とは言えませんので、部会・研究会や講習会等の取り組みを強化し、参加しやすい環境を整備して参りたいと思います。是非、皆様のご協力をお願いします。

神谷 良夫 会員 安城学園高等学校
【PCCの内容について】

議案書を読ませてもらうと、CIECの今後が非常に心配になった。「コンピュータ利用教育」が今までの学びからどこに向かおうとしているのか。「コンピュータ利用教育」があるからこそ、「こうした学び」を構築していこうという戦略的向方性が見えない。同志社大学で行われたPCカンファレンスを越える動きを作り出していないのがやはり問題であろう。情報処理学会も高校へDMを出し、多くのその道の会員を獲得している。CIECは顔が見えにくい。イメージが確立していない。つまり何をやっているかわかりづらい。教育現場にコンピュータを導入するとどうなるのだろうか。情報処理学会や教育工学会と同じこ

とをやってみてもしょうがない。CIECのアプローチは「同志社大学でのPCカンファレンス」の考えが流れていなくてはならないと思う。また大学生協の顔が出すぎるのも一般会員が増えない理由になっているのではないか。CIECは生協から自立していくべきである。

【回答】 前の質問にお答えしましたように、CIECの目的を達成するために、「コンピュータを利用した教育」を核に様々な専門、様々な立場、様々な考え方をを持った方々を集めて、そのスペクトラムの幅をなるべく広くしようと努めてまいりました。その意味では、「顔が見えにくい」、「イメージが確立しない」とのご批判はどうしても出てくるものと考えます。確かにこれは、弱点になりますが、前の質問にお答えしましたように専門を絞り、場合によっては同じ専門でも学派ごと存在する通常の学術団体とは異なる方向を目指しておりますので、この弱点と見えることを、強みとするチャレンジが必要かと考えます。

勿論、設立4年を経過したCIECにとって、会員の中で、この方針を見直すことも、再評価することも必要と存じます。今後も是非、忌憚のないご意見をお聞かせくださることを期待しております。このような様々な意見が混在する中で、前進することが大事と存じます。是非、よろしくお願いします。このような中でPCCに継続して関わってきたものとしては、常に前年のカンファレンスを評価し、点検し、参加者の声を聞き、より適当なテーマ、より関心を持たれるシンポジウムを中心に、前年を越えられるよう努力してきたつもりです。無論、評価が分かれるのも、前述のCIECのあり方からすると、歓迎すべきことで、是非多くの方からご批判を頂戴したいと存じます。皆さん、ご協力をお願いします。

大学生協との関係についても、ご意見の分かれるところですが、大学生協のみならず、企業も含めた団体会員との協力の元、「コンピュータを利用した教育」のより良い環境作りをしていこうと言う、設立の趣旨からすると、幅広いより多くの協力団体を得ることは大事でしょう。この意味では、積極的な団体会員の拡大も今後の課題です。皆様のご協力をお願いします。これが、結果的にCIECの自立となることは歓迎すべきことでしょう。しかし、自立は、各団体との関係を希薄にすることではないことは言うまでもありません。

2000・2001年度CIEC役員一覧

会長（1名）

奈良 久（八戸工業大学）

副会長（50音順 4名）

生田 茂（東京都立大学）
松田 憲（立命館大学）
矢部 正之（信州大学医療技術短期大学部）
湯浅 良雄（愛媛大学）

個人会員理事（50音順 35名）

青木 由直（北海道大学）
赤間 道夫（愛媛大学）
綾 皓二郎（石巻専修大学）
石川 祥一（松蔭女子大学）
板倉 隆夫（鹿児島大学）
一色 健司（高知女子大学）
指宿 信（鹿児島大学）
上村 隆一（福岡工業大学）
大岩 元（慶應義塾大学）
奥山 賢一（山梨大学教育人間科学部附属小学校）
小野 進（東京大学）
籠谷 和弘（東京工業大学）
小西 浩之（滋賀県立日野高等学校）
小林 昭三（新潟大学）
才田 いずみ（東北大学）
佐伯 胖（青山学院大学）
榊原 正明（鳥取大学）
瀬川 良明（北海道教育大学）
匠 英一（株式会社ヒューコム）
武沢 護（神奈川県立教育センター）
立田 ルミ（獨協大学）
田中 一郎（金沢大学）
筒井 洋一（富山大学）

鳥居 隆司（椛山女学園大学）
野澤 和典（立命館大学）
原田 康也（早稲田大学）
平井 廣一（北星学園大学）
松浦 興一（鳥取大学）
松原 真沙子（千葉敬愛短期大学）
三根 浩（同志社女子大学）
宮本 裕（岩手大学）
森 直之（東京理科大学消費生活協同組合）
吉田 晴世（摂南大学）
若林 靖永（京都大学）
和田 勉（長野大学）

監事（五十音順 3名）

今国 喜栄（全国大学生生活協同組合連合会）
妹尾 堅一郎（慶応義塾大学）
辻 正雄（早稲田大学）

団体会員理事 理事会推薦（50音順 5名）

大野 清貴
（全国大学生生活協同組合連合会）
左京 恒夫
（コンピュータウェア株式会社 営業部部长）
玉屋 喜康
（富士ゼロックス株式会社 執行役員）
野田 三喜男
（全国大学生生活協同組合連合会）
原田 永幸
（アップルコンピュータ 代表取締役社長）

以下はメーリングリストに基づく決定事項です。
継続事項、連絡事項は省略してあります。

理事会メーリングリスト

00.7.25 提案、 00298
他団体と共同して開催する催し事などに関わる取り扱い
について(案)
00.7.29 提案、 00301
理事会討議方法と議題
00.7.29 提案、 00302、 304
理事会中期目標討議の方法と年間スケジュール
00.8.22 報告、 00308、 309
6月、7月収支速報
00.7.29 報告、 00310
インタラクティブエデュケーション2000参加報告

運営委員会メーリングリスト

00.7.14 提案、 00404
「総合的な学習」の研究会発足について
00.7.18 報告、 00406
「情報教育セミナー」報告
00.7.18 提案、 00407
他団体と共同して開催する催し事などに関わる取り扱い
について(案)
00.7.21 お知らせ、 00714
第18回CIEC編集委員会案内
00.7.25 確認、 00409
NewsletterNO20発行内容確認
00.7.26提案、討議 00410、 411、 412、 413、 414、 415、
416、 417、 418、 419
運営委員について
00.8.22 報告、 00420
新運営委員とプロジェクト活動費について
00.9.7提案、討議 00427、 428、 429、 430、 431、 432、
433、 434、 435、 436、 437、 438、 440、 442、 445、 446、 447、
448
会員アンケート回答の方へメーリングリスト登録につい
て

活動日誌 (2000.7.31~9.22)

7月31日 PCC北海道打ち合わせ会議
8月01日 PCC第2回実行委員会
8月01日 1999年度第2回理事会
8月03日 2000年度定例総会
8月2~4日 2000PCカンファレンス
8月26.27日 インターネットと教育フェスティバル
8月28日 大学生協連コースウエア委員会
9月14日 PCCまとめ実行委員会
9月22日 学校訪問、桜ヶ丘女子高校

CIEC2000年度スケジュール

(2000.8.1 理事会)

9月30日 2000年第1回運営委員会/
ニューズレター-NO.21発行
10月14日 小中高部会第5回研究会(関西)
10月21日 小中高部会第6回研究会
講師 松岡正剛氏(東京)
10月28日 第23回研究会「岡本論文を考える」(東京)
11月 中期目標検討ワーキング/
ニューズレター-NO.22発行
11月 2001PCC実行委員会とプレカンファレンス
11月末日 会誌「コンピュータ&エデュケーション」
NO.9発行
12月上旬 第24回研究会
「岡本論文を考える#2」(東京)
12月23日 2000年度第2回運営委員会
1月 ニューズレター-NO.23発行
3月 ニューズレター-NO.24発行(会費請求同封)
5月26日 2000年度第3回運営委員会
6月1日 2001年度総会開催公示/必要なら補欠選挙
6月20日 議案発送
8月はじめ 2000年度理事会/2001年度総会